



Title	<図書紹介>平尾和洋・末包伸吾編著大窪健之・藤木庸介・松本裕・山本直彦著『テキスト建築意匠』
Author(s)	末包, 伸吾
Citation	デザイン理論. 2007, 50, p. 204-205
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53246
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

平尾和洋・末包伸吾編著 大庭健之・藤木庸介・松本裕・山本直彦著
『テキスト 建築意匠』

学芸出版社 2006

末包伸吾／神戸大学

例えば、日本建築学会に論文を投稿する際、論文のカテゴリーを示すことが求められています。12にわたる部門のひとつを占めるのが、「歴史・意匠」であり、さらにこの部門は、日本、日本近代、東洋、西洋、西洋近代、一般といった建築史に関わる6つの細分類と、建築哲学、建築論、意匠論、都市史、保存といった5つの細分類に分かれています。部門の多くは、細分類をさらに分けた細細分類を設定しています。「歴史・意匠」の分野が再分類まで留めていること、それは歴史と意匠が相互に密接に関係するものであることとともに、建築を総合性・全体性のもとに把握しようとする志向の表れ、すなわち、分類の設定自体が、建築論の対象となることに由来するのではないかと思われます。

一方、建築学科のカリキュラムには、建築意匠に相当するものとして、「建築デザイン（意匠）」、「建築設計論」、「建築造形論」、「建築空間論」などといった名称の講義が配備されており、こうした現象は、わが国に限ったものではありません。しかし、上述したとおり建築における「意匠」が取り扱うべき範疇は明確に限定されておらず、様々な大学のシラバスを概観しただけでも、例えば、自らの建築家としての経験を述べてゆくものから、自らの建築觀を、自作や自らの関心のもとに再編した作品群によって提示するもの、特定の建築家の建築論を論じるものなどがあり、現代においても建築「意匠」は建築美的本質を追求するという視点から、建築の形態や構成の理論に関する視点まで大きな振幅があることが確認できます。

筆者自身、勤務先の大学で建築意匠の講義を担当することになった時、まず直面した問題が、「いったい何を伝えなければならないのか」というものです。他の講義では、一定の共通理解がある「伝えるべき範囲」が決まっています。筆者の場合は、自身の能力と他の講義との関係などをかんがみ、現代の建築の理論をいくつかのカテゴリーに分け論考を加えることとし、講義用テキストを自作することにしました。

上記のような認識や経験を有する40歳前後の建築意匠関係者が集まり、日々交わす議論や設計を巡る思考の助けとなるような建築意匠に関わる基礎的知識、あるいは最低限知っておくべき理論的フレームを「できる限り広く平易にまとめたテキストが欲しい」ということが本書の企画の初端となりました。

明確に「伝えるべきこと」が定まっていない本書の企画は、通常のものとは異なり、執筆者全員でワークショップを重ね、全体構成から各章・各節の内容にいたるまで議論をつくしてつくりあげざるをえませんでした。この議論は、建築意匠のテキストという広範な主題を扱わねばならない作業でもあったため、筆者たちの勉強会といった様相も呈していました。その結果、本書は、①近代建築以降の諸理論、②建築の「表記」方法と設計者の意図、③形態（かたちや構成、全体と部分の論理）、④建築構成要素の役割、⑤建築の原点に関する論考、⑥空間と光のイメージの変遷、⑦近・現代の都市の諸理論、⑧力の流れ、⑨デザイン領域の拡大という9つのテーマを扱うことになりました。

さらに、本書の執筆にあたっては、本文13章と問題集＋テストを併せ、15回に分けて講義をすることが可能となるようになる、一つの作品が多様な側面から検討を加えうることを示すため章相互での参照関係を徹底する、索引も単純に固有名詞を羅列するのではなく、概念的なレベルを含め整理する、さらに問題集が各章のエッセンス、つまり要約版となっているので、この文章だけを再読することで、本文の中身を概読できるようにすることといった工夫を重ねました。こうした工夫は、建築意匠の特徴の一つ、建築を総合性・全体性のもとで捉えるという志向につながるものでもあります。

テーマの構成と紙幅の都合上、従来の意匠系の本に比して、美学者・美術史家・建築家などの美論、対称・均整や対比などといった美的形式原理や、あるいは色彩や装飾については詳細に解説するにはいたりませんでしたが、当初の目標であった、設計理論、かたちの操作、構造表現、空間、光、都市など、設計を巡る思考の助けとなるような基礎的知識、あるいは最低限知っておくべき理論的フレームを、意匠（design）という言葉で広く捉えつつ、わかりやすく解説することは達成できたのではないかと考えています。以下に、苦心を重ねた結果としての目次を記します。

第1章 近代建築の理論と実践

近代への変容、世紀末転換期の建築、前衛運動と近代建築の模索、近代建築の3巨匠、近代建築の成熟とその展開

第2章 現代建築の理論とその実践

現代建築の視座、歴史主義、合理主義、構造主義、場所、構造・技術、「建築」の解体から脱構築

第3章 戦後日本における建築の理論

戦後近代建築と日本、都市への進出、近代建築批判・テクノロジー批判、1980年代、

1990年代以降

第4章 建築表記の射程とその拡がり

建築表記から見えるもの、意図の伝達、思考の外在化、アンドビルトの表記

第5章 建築の原点

自然の変化と人間による構築、聖なる場所の理念と生成、建築理念と「原始の小屋」、ルイス・カーンによる元初への問い、実存的空間とゲニウス・ロキ

第6章 建築の内と外、構成要素

西洋の内と外、日本の内と外、曖昧な境界、建築の基本要素：床、屋根、壁、柱、門と窓

第7章 建築のかたち

かたちの基本、単体としてのかたち、かたちの基本操作、かたちの組織化

第8章 全体と部分

全体と部分の概念、調和とプロポーション
身体と人間尺度、ミクロコスモスの思想、
部分の集まり方、分節化

第9章 光について

建築と光、影をつくる光、差し込む光、日本の光、光の壁、満たす光、20Cの多様な光

第10章 空間について

空間の位置づけ、宇宙のイメージ、有限から無限へ、無限空間の波紋、幾何学的空间、建築の本質＝空間、空虚と非連続な空間概念、20Cの空間概念

第11章 近・現代の都市

没場所化とグローバリズム、産業革命と近代の都市化、近代都市計画とユートピア、都市イメージ論、都市のコンテクスト

第12章 力の流れと表現

積む、組む、曲げる

第13章 持続可能性と建築デザインの領域

持続可能性への視座、文化財の保存と活用、リサイクルとリユース、省エネルギーとデザイン、防災から減災のデザインへ